

◇加納光於／かのうみつお（1933-）

東京に生まれる。13歳の頃に結核に罹患。療養生活中にフランス近代詩へ傾倒、特にランボーを耽読、また鉱植物学に関心を持つ。19歳のとき今純三『版画の新技法』に触発され、版画用具も自作するなど独学で銅版画の制作を始める。

最初の銅版画集『植物』を1955年に刊行。後の制作に大きな影響を与えた瀧口修造との交流もこの頃に始まっている。1958年頃には《燐と花》、《星・反芻学》など物質的かつ硬質でありながら宇宙や生命の神秘を示唆するモノクローム版画を制作し国際展などで高い評価を得た。

1960年代中頃から70年代末にかけて、亜鉛合金をガスバーナーで焼いたレリーフ作品、鮮烈な色彩のメタルプリント、大岡信との共作による《アララットの船あるいは空の蜜 No. 5》といったオブジェ制作など、「版」を基軸にしながらも時にその枠を大きく逸脱しつつ、実験的な表現を試みている。また、この時期の瀧口修造、大岡信らとの親密な交友により加納の表現は詩的・文学的世界へと深く触手を伸ばし、作品世界を拡げている。

1970年代後半にはカラーリトグラフの連作を発表。顔料や溶剤の研究を重ねて獲得した加納の色彩は、透明な中にゆらめき、また、瀧口修造もかつて熱中したデカルコマニーの技法を援用したフィルムを使った描写法は、《待つことそれゆえに 1》など1980年以降の油彩による表現に繋がってゆく。一方、色彩に向けられた探求は銅版の上でも試みられ、多色インタリオによる連作《「波動説」——intaglioをめぐる》はその代表例ともいえる。

◇辰野登恵子／たつのとえこ（1950-2014）

長野県岡谷市に生まれる。1972年東京藝術大学美術学部卒業、1974年同大学院を修了し、同大学美術学部版画科助手となる。1970年代中頃から作家活動を開始し、ドットやグリッド、ストライプなどの規則的なパターンを用いて理知的で抑制された絵画や版画を発表し、若くして注目を集める。1979年「第11回東京国際ビエンナーレ」（東京国立近代美術館）、1980年「1980 日本の版画」（栃木県立美術館）、「ART TODAY '80 絵画の問題展 ロマンチックなものをこえて」（西武美術館）、1984年「現代美術への視点 メタファーとシンボル」（東京国立近代美術館）、1988年「現代日本の動勢——絵画PART2」（富山県立近代美術館）などに出品。また、1995年「辰野登恵子 1986-1995」（東京国立近代美術館）、2012年「与えられた形象——辰野登恵子／柴田敏雄」（国立新美術館）開催。オールオーバーな表現、連鎖するS字形によるアラベスク模様のパターン、連続する短冊形がかたちづくる大きなひし形、緊張感のある円形や方形など、豊かな色彩による独自の有機的な抽象表現を生涯探求し、80年代以降の日本を代表する画家の一人として高い評価を得た。

◇森芳雄／もりよしお（1908-1997）

東京に生まれる。叔母、森ふみの養子となる。1926年慶應義塾普通部を修了し、本郷絵画研究所に通う。1928年一九三〇年協会研究所に入所し油絵とデッサンを本格的に学ぶ。以降、一九三〇年協会展、二科展、独立美術協会展に出品。1931年渡仏。1932年サロン・ドートンヌに入選。1934年帰国。1936年独立美術協会展でD氏賞を受賞し翌年同協会の会友となるが、1939年退会し自由美術協会に参加。1945年戦禍により自宅と全作品を焼失。戦後、敗戦の痛手と作品を失くした虚無感、妻と幼子を抱えた窮乏生活の中で代表作《二人》（1950年）を描き上げる。1964年自由美術家協会を退会し主体美術協会の結成に参加、創立時から代表を務める。以降、同展をはじめ「平和美術展」、「日本国際美術展」、「現代日本美術展」などで活躍する。1961年から1981年にかけて武蔵野美術学校、武蔵野美術大学で後進の指導にあたる。1962年、麻生三郎との二人展が神奈川県立近代美術館で開かれる。1990～1991年「森芳雄展」（茨城県近代美術館、三重県立美術館など）開催。

◇宮島達男／みやじまたつお（1957-）

東京に生まれる。1980年東京藝術大学絵画科に入学。1986年東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。1990年アジアン・カルチュラル・カウンシル（ACC）の招待でニューヨーク滞在。1990～1991年ドイツ文化省芸術家留学基金（DAAD）留学生としてベルリンに滞在。1993年カルティエ現代美術財団アーティスト・イン・レジデンス・プログラムによりパリ滞在。1998年ロンドン芸術大学名誉博士号授与。2006～2016年東北芸術工科大学副学長、2012～2016年京都造形芸術大学副学長。

「それは変化し続ける」「それはあらゆるものとの関係を結ぶ」「それは永遠に続く」というコンセプトに基づき、1980年代半ばからLEDデジタルカウンターを使ったインスタレーションや立体作品を中心に制作。1988年「ヴェネツィア・ビエンナーレ アペルト'88」で注目を集めて以来、国内外で個展・グループ展多数。一方で、広島や長崎の悲劇を主題にしたプロジェクトも手掛け、2017年からは東日本大震災犠牲者の鎮魂と震災の記憶の継承を願い、3,000個のLEDデジタルカウンターを東北地方に恒久設置することを目指す「時の海——東北」を継続的に制作するなど、社会的な参加型プロジェクトも展開。1992年には当館において国内公立館初の個展「宮島達男——133651の世界——」を開催した。

近年の主な展覧会に2019年「スカイ・オブ・タイム」（エスポー近代美術館、フィンランド）、「如来」（上海民生現代美術館、中国）、2020年「クロニクル1935-2020」（千葉市美術館）、2020～2021年「STARS展：現代美術のスターたち——日本から世界へ」（森美術館、東京）などがある。

◇河原温／かわらおん（1932-2014）

愛知県刈谷市に生まれる。愛知県立刈谷高等学校卒業後、上京。独学で絵画を学び、19歳のデビュー直後から読売アンデパンダン展、デモクラート美術展などに参加し、〈浴室〉シリーズや〈物置小屋の出来事〉シリーズ、「印刷絵画」などを発表。1954年に日本を立ち1965年にニューヨークに定住。〈日付絵画〉のシリーズを1966年1月4日より開始。その日の日付をカンヴァスに描き、当日中に完成しなければ破棄、ボール紙でつくった箱の蓋の内側にその日の新聞を貼り付け、完成した作品を収めるというルールのもと制作し続け、作家の代名詞的シリーズとなる。以降〈I Read〉、〈I Met〉、〈I Went〉、〈I Got Up〉、〈I am still alive.〉、〈One Million Years〉など多数のシリーズを手掛け、日本を代表するコンセプトチュアル・アーティストとして知られる。主な個展に1973年「On Kawara 1973—One Years Production」（ベルン美術館、スイス）、1980～1981年「河原温 連続／非連続 1963-1979」（国立国際美術館、大阪、ほか）、1996～1998年「河原温 全体と部分 1964-1995」（東京都現代美術館ほか）、2015年「On Kawara, Silence」（グッゲンハイム美術館、ニューヨーク）。2014年、ニューヨークにて死去。

◇蔡國強／CAI Guo-Qiang (1957-)

中国福建省に生まれる。1985年上海演劇大学舞台美術科を卒業。自由な活動の場を求めて1986年末に来日し、筑波大学河口龍夫研究室に在籍。1993年に火薬と導火線を使った《万里の長城を1万メートル延長するプロジェクト》、1994年にはいわき市立美術館にて「蔡國強——環太平洋より——」を実施し国内外の注目を集める。1995年以降はニューヨークに拠点を移し、国際的なアートシーンの中で活動を続ける。初出展となる2005年の「ヴェネツィア・ビエンナーレ」では中国館のキュレーターを務めた。2008年北京オリンピックの開会式・閉会式の視覚特効芸術監督として打ち上げ花火で《歴史の足跡》を演出。1999年第48回ヴェネツィア・ビエンナーレ金獅子賞を受賞。2012年高松宮殿下記念世界文化賞を受賞。

1990年代初頭からいわきとの関係が始まり、2013年にはいわき市民との協同により屋外美術館「いわき回廊美術館」をオープン、2011年の東日本大震災以降、回廊美術館を中心とした「いわき万本桜」プロジェクトの支援も続けるなど現在でもいわきを日本での活動拠点の一つとしている。

近年の主な展覧会に2020年「Odyssey and Homecoming」(故宫博物院、北京)、2017～2018年「西洋美術史をめぐるひとりの旅」(プラド美術館、オーストリア／プーシキン美術館、ロシア／ウフィツィ美術館、イタリア)、2015年「帰去来」展(横浜美術館)などがある。

◇ロジャー・アックリング／Roger ACKLING (1947-2014)

イギリス、ロンドンに生まれる。1968年セント・マーチンズ・スクール・オブ・アートで美術の学位を取得。在学中にリチャード・ロングやハミッシュ・フルトンと知り合う。1976年以来、イギリスをはじめ欧米各国で作品を発表。イギリス南部、ノーフォークの海岸を主な制作拠点とし、海辺で収集した木切れなどに手のひらほどの凸レンズで太陽の光を刻印した作品を制作。1982年「今日のイギリス展」(東京都美術館)に出品、初来日する。以降毎年のように来日し、個展を開催。1996年にはハミッシュ・フルトンと和歌山県に3週間滞在し、現地の自然の中で制作した作品による「紀伊半島を歩いて——ロジャー・アックリング&ハミッシュ・フルトン」展(和歌山県立近代美術館)を開催した。2014年6月5日、逝去。

◇宮永愛子／みやながあいこ (1974-)

京都市に生まれる。1999年京都造形芸術大学芸術学部美術家彫刻コース卒業。2006年アジア・カルチュラル・カウンシル (ACC) の助成により渡米。2007年文化庁新進芸術家留学制度により渡英。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。常温で昇華するナフタリンなどを素材に「変わりながらも存在しつづける世界」を表現するなど、気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品で注目を集める。2011年第22回五島記念文化賞美術部門新人賞を受賞。2013年「日産アートアワード」初代グランプリ受賞。2020年第70回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。

主な個展に2012年「宮永愛子：なかそら——空中空——」(国立国際美術館、大阪)、2014年「宮永愛子の茶室『そらみみみそら(五月雨御殿)』」(山口県立萩美術館・浦上記念館茶室)、2017年「みちかけの透き間」(大原美術館有隣荘、岡山)、2019年「宮永愛子：漕法」(高松市美術館)などがある。

◇松井冬子／まついふゆこ (1974-)

静岡県周智郡に生まれる。1994年に女子美術大学短期大学部造形学科油彩画専攻を卒業。社会人経験ののち東京藝術大学美術学部へ入学し、2002年に美術学部絵画科日本画専攻を卒業。2004年同大学大学院美術研究科修士課程日本画専攻修了。2007年同大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻日本画研究領域修了、論文「知覚神経としての視覚によって覚醒される痛覚の不可避」で博士号(美術)を修得する。主な個展に2008年「松井冬子展」(平野美術館、静岡県)、2011年「松井冬子展 世界中の子と友達になれる」(横浜美術館)、2018年「松井冬子『生々流転』」(新宿瑠璃光院白蓮華堂)などがある。

「痛み」、「狂気」を追求し、「雌」に焦点を当て、幽霊画、人体、動物を題材に、内臓をさらけ出す女性を日本の伝統的な技法で残酷なまでの細密さで描いた作品を制作している。

◇杉本博司／すぎもとひろし (1948-)

東京に生まれる。1970年立教大学経済学部を卒業後、渡米。ロサンゼルスのアート・センター・カレッジ・オブ・デザインで写真を学び、1974年の卒業後にニューヨークに移住。1970年半ばから〈ジオラマ〉シリーズに取り組み、「写真は真実を写す」という観念を覆した。続いて、〈劇場〉シリーズ、1980年代からは作家の代表作となる〈海景〉シリーズの制作を開始。主な個展に、1988年「杉本博司：ジオラマ、劇場、海景」(ソナベント・ギャラリー、ニューヨーク、ほか巡回)、1995年「Sugimoto」(メトロポリタン美術館、ニューヨーク)、2015年「観念の形」(フィリップス・コレクション、ワシントンD.C.)、2016年「杉本博司 ロスト・ヒューマン」(東京都写真美術館)などがある。1989年に毎日芸術賞、2009年に高松宮殿下記念世界文化賞、2010年に紫綬褒章、2013年にフランス芸術文化勲章オフィシェなど受章多数。明快なコンセプトと緻密な写真技術によって「時間」、「光」、「モダニズム」をテーマに数々の名作を生みだし、国内外で高い評価を得ている。

◇オノ・ヨーコ/Yoko ONO (1933-)

東京に生まれる。2歳で父の暮らすサンフランシスコへ移住、4歳で母とともに日本へ帰国。その後、父の転勤先ニューヨークと日本を往来、1953年20歳のときにサラ・ローレンス大学に入学後、音楽と詩を学ぶ。1956年サラ・ローレンス大学を退学しアーティスト活動を開始。1959年からフルクサスのジョージ・マチューナスらと共に活動を行い、床に置かれたカンヴァスを観客が踏みつけることで完成する《踏まれるための絵画》などの前衛作品を発表。1962年から1964年までの日本帰国時には、彼女の衣装を観客がはさみで切り取るというパフォーマンス《カット・ピース》や、言葉による作品集『グレープフルーツ』を発表するなど、活動の初期段階から強いコンセプトをもった多くのパフォーマンスや彫刻、インスタレーション、映画、音楽などを通し、一貫して「愛」と「平和」を叫び活動する。2009年「第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ」で生涯業績部門の金獅子賞を受賞、日本人で初の受賞者となる。1981年には平和活動、音楽活動をともに続けた配偶者、ジョン・レノンとの共作アルバム『ダブル・ファンタジー』がグラミー賞アルバム・オブ・ザ・イヤーを受賞している。

◇ゲルハルト・リヒター/Gerhard RICHTER (1932-)

旧東ドイツ、ドレスデンに生まれる。1952年ドレスデン芸術アカデミーに入学し絵画、壁画を学ぶ。1959年カッセルの「ドクメンタII」で抽象画に触発され、1961年ベルリンの壁が建設される半年前に旧西ドイツに移住、デュッセルドルフ芸術アカデミーに入学。1962年ごろ「絵画や構成や色彩とは無関係」という新たな芸術観により写真の模写を始める。以降、「フォト・ペインティング」、「カラーチャート」、「グレイ・ペインティング」、17世紀以降のドイツ・ロマン派を想起させるような風景画、「アブストラクト・ペインティング」、「オーバー・ペインテッド・フォト」など、様々なスタイルを同時期に並行させながら、一貫して「絵画の可能性」を追求し続けている。

1964年にミュンヘン、デュッセルドルフ、ベルリンで初個展を開催以来、「第36回ヴェネツィア・ビエンナーレ」(1972年)をはじめ、計6回の「ドクメンタ」など多数の国際展に参加。1997年「第47回ヴェネツィア・ビエンナーレ」で金獅子賞、同年、高松宮殿下記念世界文化賞を受賞。

近年では、2011～2012年に大回顧展「Panorama」がロンドン、ベルリン、パリを巡回。2013年にミュンヘンのレンバッハハウスで個展「ATLAS」開催。2014年にはバーゼルのバイエラー財団美術館では自ら展示構成を行い、注目を集めた。日本では2005年に金沢21世紀美術館と川村記念美術館(現・DIC川村記念美術館、千葉)で回顧展を開催、2016年より《ゲルハルト・リヒター 14枚のガラス/豊島》を瀬戸内海の豊島(香川)に恒久展示している。

◇クリスト/CHRISTO (1935-2020)

ブルガリア、カプロヴォに生まれる。ソフィア及びウィーンの国立美術学校に学ぶ。1958年塗料の入った缶をカンヴァスで梱包した作品を発表。以来、配偶者であるジャンヌ=クロードとともに建築物や無人島などを梱包する大規模なプロジェクトを世界各地で実現させ、梱包の作家と呼ばれる。日本では6年間の準備期間を経て、1991年茨城県とカリフォルニアで同時に3,100本の傘を立てた「アンブレラ」プロジェクトが注目を集めた。没後1年となる2021年には、1961年に構想したパリのエトワール凱旋門のプロジェクトが完成し話題を呼ぶ。

包む、覆うという基本理念に基づくクリストの作品は、環境を取り込んだ作品へと発展し、地域の自然、人々とのダイナミックな関係を重視した一回限りのイベント的な手法は「もの」としての作品の在り方に一石を投じた。

◇塩田千春/しおたちはる (1972-)

大阪に生まれる。京都精華大学洋画科在学中(1996年卒業)の1993年オーストラリア国立大学キャンベラ・スクール・オブ・アートに留学。1996年ハンブルク美術大学、1997年～1999年ブラウンシュバイク美術大学、1999年～2003年ベルリン芸術大学に学ぶ。以降ベルリンを拠点に活動。赤や黒の糸を張り巡らせた緊張感に満ちた空間構成、洋服や窓枠など生活の記憶が刻まれた物品によるインスタレーション、映像、パフォーマンスなど多彩な制作活動をおし、一貫して「不在の中の存在」を追求。

主な展覧会に、2008年国立国際美術館、2013年高知県立美術館での個展、また2019年に森美術館で開催された個展「魂がふるえる」が海外巡回するなど世界各国で高い評価を得る。2015年「ヴェネツィア・ビエンナーレ」に日本館代表として参加。2008年芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。2010年より京都精華大学客員教授。

◇詫摩昭人/たくまあきひと (1966-)

熊本に生まれる。1993年滋賀大学大学院修了後、渡欧。1994年までシルクロ・デ・ベラス・アルテス(マドリード総合芸術センター)に在籍。1992年初個展(ギャラリー射手座、京都)、以降個展多数。

1992年より様々な人の行動の記録をカンヴァスに記録する〈行動表絵画〉、1997年には自宅を開放した展覧会(安田早苗と共同)、2004年より2メートルの刷毛で一気に仕上げる油彩作品〈逃走の線〉を制作。

2005年「震災復興10周年記念国際公募展兵庫国際絵画コンペティション」で優秀賞受賞。2006年和光大学の絵画の専任教員となる。2011年、2014年Saatchi Online Showdownでファイナリストになるなど海外での評価も高い。いわき市においては2017年のアートフェスティバル「玄玄天」に参加している。

2022年現在、和光大学芸術科教授。

◇井出創太郎/いでそうたろう (1966-)

愛知県立芸術大学美術学部美術科絵画油画専攻卒業。1991年同大学院美術研究科絵画油画専攻修了。1987年より銅版画を制作。1994年「現代の版画」(渋谷区立松涛美術館)、1997年「現代日本美術の動勢——版/写すこと/の試み」(富山県立近代美術館)などに出品。近年は家屋に襖の形式で銅版画を入れ込む、大型の作品を展開。エッチングの腐食の過程で重なるいくつもの時の記憶が作品として昇華されている。

現在、愛知県立芸術大学美術学部油画専攻准教授。

◇新宅加奈子／しんたくかなこ（1994-）

大分県生まれ、京都を拠点に活動。2019年京都造形芸術大学大学院芸術研究科総合造形領域修士課程専攻修了。2010年より「生きていることを確認する行為」として全身に絵具を纏い始める。2018年に初個展「I'm still alive」(KUNSTARZT、京都)、その後2019年に「embodiment」(KUNSTARZT)、「indication」(京都写真美術館)、2020年に「Then」(Fabcafe Kyoto)、2021年に「FROW」(+2artギャラリー、大阪)、「layer」(KKAGギャラリー、東京)、「stratum」(KUNSTARZT、京都) など、精力的に個展を開催。2019年「ヨコハマトリエンナーレ2020エピソード00」に出演。